

五月三〇日

七時半屋上菜園の世話。朝食を取って十時大学。院レクチャー準備。今日はミースのバルセロナパピリオンとL・コルビュジェのラ・トゥーレット修道院について。十七時内閣府。夜柴原の仕事を見る。なかなか良い。

五月三一日

十時過ぎ原口さん娘さんつれて来宅。茶飲み話し。茶飲み話し位様々な意味が出現するモノはない。台風が岡山辺りに居るらしく、雨が降っている。十一時半家を出て大学へ。今日は西早稲田へ。古川貞二郎氏レクチャー受講の為。十二時半西早稲田観音寺近くの学生町レストランでカレーライス。観音寺塗り替えてる。前より大人しく、静かになって良い。時代に合ってきている。思えば今、三つ目の寺の仕事に取りかかっているのだが、何やら佐藤健が手引きしているように思えてならない。あんまり変な方へ手引きするなよ、とブツブツ独り言を考えながら、カレーライスを待っている。雨もなかなか良いな。観音寺の玄関先のツボには滝のように雨水が流れ込んでいる。花一輪挿してゆこうか。十三時前法学部一号館レクチャールームで休んでいる。公共経営事務所にもぐりの聴講届けを口頭で出す。十三時古川副長官教室の隅に隠れるようにいた私をすぐに発見して「帰って下さいよ」と言われたが、居座り強盗のように居座る。このレクチャーは流石に

帰れと言われても聴く価値があるくらい生きています。桁外れのリアリティがある。二十一名の院生は良い体験をしている。この中から将来政治家がでるな。院生達も臆せず良い質問を連発している。これが理想的な大学院の授業風景なのだと思う。しかし、この雰囲気を作り出せる教師が日本にどれ程いるかな。

十五時過理工学部キャンパスに戻る。難波和彦の東阪往来記初めて読む。読み始めたらずまらなくなつて、何年か分を読み切つた。チラホラ私の名前が出てくるのが、矢張り気になるんだな。コンピューターの他人の記録を読むのは初めてだったので、私の世田谷村日記がどう読まれているのかを疑似体験する事が出来た。十八時過研究室発。しかし考えてみれば土曜日に院生が誰も研究室に来ていないのはなんと残念だ。十九時過地下。世田谷村ゼミ。光嶋のフィンランドデザイン研究。良く調べてはいるが平板である。これでスタッフ全員の発表を聴いた事になる。欲を言えばキリが無いのは重々承知ではあるが、物足りない。二十時半原口さん来宅。娘さんの仕事の件なんとかしてあげたい。今日で、今年も五月が終わる。ほんのわずかな事しか出来ぬままに時間が過ぎてゆく。少しずつ積み上げているような気もするが不安だ。今日の午後研究室に来院希望の台湾の学生の感性は良かった。エンジンバラ大学卒で李祖原の知り合いの娘さんらしいが、入試をうまくいかくぐつてくれれば良いのだが。秋からは外国人学生が倍増する。チリ、ギリシャ、カナダ、中国、台湾、アメリカ、ドイツと多様な国籍の学生が出入りすることになる。モロッコの外人部隊とカスバの女みたいになつても良い位の決意でやらなければ中途半端になるかも知れないね。

六月一日

一時半、何故か何をすることもなく起きている。南鳥山町の安田金物店が閉店してしまった。見事な位に働き者のオヤジとオバさんの姿も消えた。毎朝あの街角を曲がるのが楽しみだったのに。

「へい、お早う。」の声も聞く事ができない。夫婦そろって働きの者で正直者だった。働いているのが楽しみだった典型的な町の小売店舗の、欲張らない商売人であった。閉店して小さなシャッターを閉めたマンマの町角を曲がるのは、もう楽しくなくなった。

こうやって町は滅びてゆくんだと思う。働くのが楽しみで、楽しんで生活していた老夫婦が居なくなったそれだけで私にとっての町角の一つは消えた。安田金物店はそこで仕事する人を少し知るだけで、町角に意味が生まれることを私に知らせた。人の生活に小さくても意味がある事を知る事で、物理的なただの町角に、別の意味が生まれ得るのを私は知ったのだが……。私の地図から一つの町角が消えた。流通の合理化だけが商店街の目的ではあるまい。生活の楽しみの中に物のささやかな売り買いがくるまれているような、そんな価値を創り出さなくては商店街の意味はなくなるばかりだろう。しかし、あるいは、すでに商店街はあり得ぬモノとして考えるべきなんだろうか。大型店舗はいずれ、コンビニユーザーショッピングの無店舗商店街に敗けるに違いない。そうやって人々はようやく安田金物店の老夫婦を思い起こすのであるうか。

まちづくり支援センターの店を閉めてから、だいぶ経った。昨日研究室の大テーブルの上にヒバの木枕が二つあったので、どうしたと聞いたら、まだまだ注文が来ていると言う。ウーム、困ったな。再開するか。しかし、これ以上拡散していてもな。よい人材がいれば話は別なのだが。

八時友岡さん夫妻と猪苗代湖鬼沼へ。東北道を走る。昼前鬼沼

着。雨の中を歩き土地検分、と言っても数十ヘクタールの土地で山あり、谷もあり、全長2KMくらいもあるので、全体の感じを把握するだけにとどまった。作って持って行った、こちらの案もどうやら、実際の土地には合っていない。仕切り直した。しかし鬼沼の土地そのものは素晴らしかった。神話的風景とでも言おうか。夜叉や弘法大師伝説まで生み出しているのだから。十八時帰京。鳥山の寿司屋で友岡さんにごちそうになる。二〇時帰宅。アメリカのユタ州から徳子がお世話になっていた婦人二名、来村。私は倒れるようにして寝た。

六月二日

十時過地下。生活用具のすすめ方打合わせ。昼過、屋上菜園に昨日鬼沼より持帰った草花を植え込む。花咲き乱れ屋上は今、美しい。十七時メモ、トンレサップの水上市集落について書く。キャプションも含め二〇時前修了。世田谷村市場のコピー原稿書く。ひばの木枕「夢枕正三郎」とオベリスク型照明「蝉折」についてひばの木枕は注文が途切れないのでリバイバル生産する事にした。蝉折は木製の照明器具シリーズである。

こういう小さな生活用品を少しづつ作って、販売してゆくのは私が珍らしく途切れる事なく、やり続けてきた事だ。百のアイテムに辿り着くことが出来たら少し整理して本格的に論じてみたい。もう一つの小さな市場を現実化してみたいと考えてはいるのだろう。